

12. ^{99m}Tc -DMSA による腎スキヤンの検討

○立野 育郎 多田 明
(国立金沢病院・放)

^{99m}Tc -dimercaptosuccinic acid (^{99m}Tc -DMSA) を腎スキヤン用剤として使用して1年半になるのでその結果を報告する。第一ラジオアイソトープ製の Sn-DMSA パイアルに $^{99m}\text{TcO}_4^-$ 2ml を入れてよく振とうし ^{99m}Tc -DMSA を得る。本剤を静注した健常腎の放射能は2—2.5時間後に最高値に達し、以後ほぼ ^{99m}Tc の減衰に従って減少し、尿中排泄は6時間で投与量の10—20%であった。それで静注2—4時間後に腎シンチグラフィを実施している。

対象は5—73才、男29、女43、計72例である。本剤は腎皮質に集る物質で、髄質の放射能は低く辺縁明瞭に描画されたが、肝脾集積もみとめた。IVP で腎描出なく、レノグラムで機能低下～無機能でもスキヤン画質 Good—Poor のものもあったが、creatinine 値に注目すると3 mg/dl 以下で Excellent—Good, 4 mg/dl 以上で Poor—Non-visualized であった。

^{99m}Tc -DMSA は腎被曝量が少なく、 ^{203}Hg -chlor-merodrin にかかわって使用されるべきであろう。

13. ^{99m}Tc -MSA による胎盤スキヤンについて

分校 久志 道岸 隆敏
多田 明 久田 欣一
(金大・核)

われわれはこれまで約2年間に48例の胎盤スキヤンを行なっているがその内46例が ^{99m}Tc -HSA に行われている。今回これらの follow-up 症例のより正常所見を決定し、また各所見を用いた診断基準の有用性について検討を加えた。 ^{99m}Tc -HSA は1.0—5.0 mCi (平均2.2 mCi) を静注し、遅くとも5分以内に撮像を再始する。一部の例では静注直後より10—20秒毎の RI アンギオもポラロイド又はマルチイメージャーにて撮像した。 ^{99m}Tc -HSA にて描出される血液プールと

しては胎盤、子宮静脈、子宮壁、腹部大動脈、腸骨動脈、会陰部血液プール、膀胱、腎などである。A) 子宮静脈と子宮壁、B) 胎盤位置と子宮静脈、C) 胎盤位置と子宮壁のそれぞれ左右の濃度差を比較し、より集積大の部の一致度をみると左右のみの一致度はAで85.7%であるが全体では54.8%と低い。Bでは52.4%、Cでは71.7%となり胎盤位置不明瞭の場合子宮壁濃度が手がかりとなる。胎盤下縁が子宮高の1/3以下の例は全体の48%、22例であった。これらについて子宮上端部の位置について検討すると、これらの診断基準を全て満足するもの3例は全て前置であり、全体として95.5% (21/22例) の診断率を得た。胎盤位置が通常のスキャンで不明瞭な例でも RI アンギオにて同定可能であった。

14. Multiple Myeloma の骨スキヤン

渡辺 紀昭
(徳島大・放)
二谷 立介 小泉 潔 道岸 隆敏
利波 紀久 久田 欣一
(金大・核)
杉原 政美
(福井県中・放)

過去2年半の間に当科では行なった骨スキヤン約800例のうち、多発性骨髄腫と診断された9例につき、骨スキヤンと骨 X-P の所見を比較した。この9例のうちから、全身骨 X-P にて著明な所見を認めたのに骨スキヤンにてほとんど所見を認めなかった症例及び骨スキヤンにて数カ所に異常を認めたが、X-P 所見に比し軽度であった症例、さらに骨 X-P と骨スキヤンの所見が同程度であった症例の3例を呈示した。

9例のほとんどが X-P にて著明な異常所見を呈しているにもかかわらず、スキヤンにてほとんど変化を認めなかった。この事より、多発性骨髄腫にて X-P の変化より早期にスキヤンにて異常を検するのは困難と思われた。

しかし、1例において骨スキヤンは骨 X-P と同